



## 平和への願い

例年にならない暑さが続いておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

このところの猛暑日のためか、熱中症のニュースがよく見られるようになりました。暑さのためにクーラーを使用する頻度は多くなっていますが、高騰している電気代のことを考えると、つい節約を考えてしまいます。私自身も30年ほど前はクーラーを使用せずに扇風機だけで生活していましたので、大丈夫と考えがちですが、現在の平均猛暑日日数は30年前と比較して3・3倍に増えているとの統計が出ています。「昔は大丈夫だった」と過信せずに、自分や家族のいのちを守るために是非クーラーをご利用ください。

先日、ロシアのウクライナ侵攻が、500日を超えたとのニュースが報道されました。その中で、民間人の死者が9000人を超えたとの情報があり、実数ははるかに多いとの指摘がありました。今後も多くの人々のいのちが失われることを考えると、何もできないことに苦しさを感じています。

そのような中で、6月24日の朝日新聞に「沖縄のチムグクル届けたい」との記事が掲載されていました。そこには、戦後78年の「慰霊の日」を

迎えた沖縄で行われた沖縄全戦没者追悼式でつくば開成国際高校3年生、平安名秋さんの「平和の詩」が紹介されていました。この詩は祖母の涙を見て感じた沖縄の「チムグクル（真心）」を詠っています。その一部を紹介します。

『平和とは何かを

私達にできることは何かを

私は過去から学び、そして未来へと語り継いでいきたい

おぼあ涙を

沖縄の想いを

かけがえのない人達を

決して失いたくはないから

今日も時は過ぎていく

いつもと変わらずに

先人たちが紡いできた平和を

次は私達が紡いでいこう

そして世界に届けていきたい

平和を創り

守っていく

この沖縄の「チムグクル」を『

普段通りの当たり前前の生活が突然失われることは、自然災害でも起こりえます。しかし、国同士の争いで大切な人を失う悲しみを2度と

繰り返さないよう、日々祈りをもって平和を願い続けていきたいと思

います。

施設長 高原信夫

施設長 高原信夫

施設長 高原信夫

施設長 高原信夫

施設長 高原信夫

## 製作レクリエーション

ここ数年、ひまわりでは保育園へプレゼントするために製作系のレクリエーションにも力を入れています。年間に数度のペースではありますが、入園式のメッセージボードやランチマットなどをプレゼントすることができました。7月は七夕がありましたので、その飾りもスタッフ・お客様みんなで作業を分担しながら製作。しばらくひまわりの部屋にも飾っていましたが、他の部門の方が見に来てくれるほどの大作(?)となりました。

認知症対応型通所介護  
ひまわり主任 穴道 美知子



第276号

令和5年7月15日発行  
(毎月1回 15日発行)

責任者:施設長 高原信夫  
〒241-0802  
横浜市旭区上川井町 1988  
社会福祉法人アドベンチスト福祉会  
シャローム横浜

編集委員

小林・荒金・石橋  
☎045-922-7333

<https://www.adventist-welfare.jp/yokohama/>



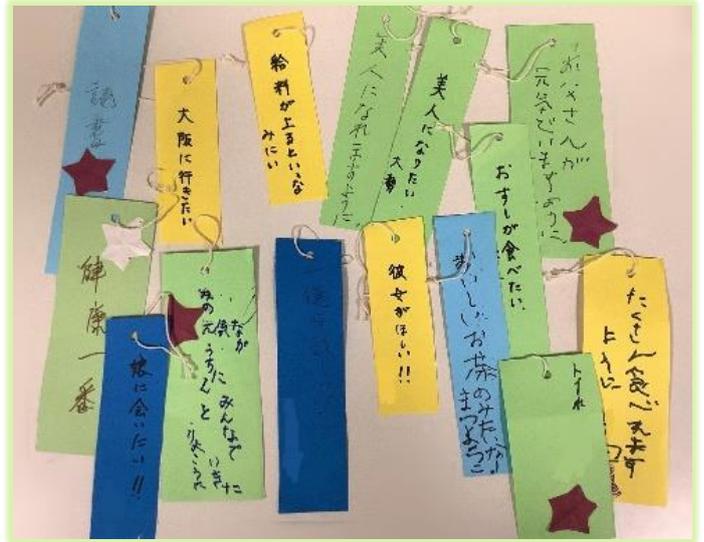
## 七夕の短冊に書かれた願い

7月7日は七夕でした。

例年、短冊に願いを書いて笹に飾っています。ショートステイご利用者の中には「これしかないだろう!!」と『一億円が欲しい!』と力強く書かれて方がおられ、多くの職員から共感を得ていました。

ご利用者、ご家族が安心してショートステイをご利用いただけるよう、お手伝いしてまいりますので、引き続きよろしくお願いたします。

ショートステイ主任 山本 朋子



## マグロの解体ショー

6月18日、栄養課主催の行事でマグロの解体ショーを行いました。

当日の朝8時、長崎県より直送された30キロのクロマグロが届き、昼食時に入居者の方々にマグロ丼を提供致しました。

入居者の方々は、美味しそうに召し上がっておられました。

栄養課課長 小寺 秀偉



## 福祉の原点、井深八重の人生を通して

## 第184回 チャプレン 上前 至

こんな人がいたのかと驚くと共に畏敬の念を抱くのは私だけであろうか。それは1989年（平成元年）に92歳で没した井深八重という一人の女性がいたということからである。彼女は1961年、第18回ナイチンゲール記章を受賞し、1975年（昭和50年）には出身大学の同志社より名誉文学博士号を授与されている。そして同年（78歳）に米国タイム誌から「マザー・テレサに続く日本の天使」と紹介された。彼女は、そのほか数々の名誉勲章を授与されている。が、しかし、やはり大切なことは勲章ではなく誰にでもそう簡単には真似のできない彼女の生き方であったことには間違いない。

それは突然、起こった。22歳の時（大正8年）、女性として一番華やかなその時に彼女はハンセン病と宣告され、社会から戸籍も抹消、名前も堀清子と改名させられたのである。しかし、それから3年

後、東京帝国大学付属病院で精密検査の結果「健全にして異常なし」という証明を得、ハンセン病ではない事が判明したのである。それは、その隔離施設に、もはやいる必要はないことを意味する。自由の身となった。彼女は社会復帰の権利を得たのである。しかし、彼女はそうしなかった。なぜならば彼女はこういう隔離社会の人達を知った以上、この人たちを残して自分だけが帰るわけにはいかないと感じたのである。すなわち、八重は、そこで足りなかった看護師資格を取得しナースとなり、その一生をハンセン病患者のケアのために捧げていった人となったのである。一粒の麦となって。「一粒の麦、地に落ちて死なば唯一つにてあらん。もし死なば多くの実を結ぶべし」ヨハネ12：24

